4月25日

特集

チェルノブイリ原発事故24周年の集い
広島・長崎被爆65年と
チェルノブイリ25年を結んで

今年

来年

チェルノブイリ原発事故24周年の集いが開かれました

2010年は広島・長崎被爆６５年にあたります。4月25日（日）大阪・阿倍野市民学習センターで、被爆65年と来年のチェルノブイリ25周年を繋ぎ、ヒバクシャの思いと実態を学ぶ集会をもちました。

まずは、スライド報告「史上最悪の原発事故チェルノブイリから24年、チェルノブイリのヒバクシャと共に取り組んできた私たちの活動」。現地の写真や地図や絵がたくさん入った長沢智行君お手製のスライドで、初めて参加する方にわかりやすく、事故の概要からチェルノブイリの位置､被災者の状況を伝えました。

次に、「被爆65年を振り返って」。集会のメインテーマとして、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の代表で長崎被爆者の山科和子さんのお話をききました。御自分自分の被爆体験を振り返って「ヒバクの先輩」として、チェルノブイリのヒバクシャへの思い、世界のヒバクシャへの思い、次の世代に今伝えたいことを語ってもらいました。しかし、実は山科さん、転倒して腰の骨を骨折し退院したばかり。本当はこの日の参加もかなり無理をしてのことでした。「痛いのはずっと痛い。でも今日は行かんわけにはね。いままでいつも一人で何でもしてきた。体が動けば語りたい」・・・途中退場の準備もしていたけど話し出したら思いがあふれて・・・頭の下がるファイトで、質疑応答は最後まで、追加のお話にも熱が入りました。

歌と朗読のコーナーは、今年は3部構成になりました。①「ベラルーシの友人からのメッセージ」は山科さんのお話をうけて前回ベラルーシのヒバクシャの皆さんからいただいたメッセージを長辻幸さんの構成で朗読、②次に栗原貞子の「うましめんかな」を、森田留美さんの歌と長辻さんの朗読のセッションで、③最後に戦争とヒバクをこの世からなくしていこうというメッセージと、人が人を思う心ふるさとを思う心を2曲にこめて歌ってもらいました。ジョルジュムスタキの「ヒロシマ」とイサコフスキー作詞の「ともしび」です。

最後に事務局振津かつみさんから、「ノボキャンプ」の紹介と参加した子ども達からのメッセージの報告を行いました。現地の状況は相変わらず日常的な生活上の困難や、健康不安が続いています。非汚染地へのキャンプは、子どもたちのニーズからも援助をしやすいことからも、もっともっと進めたい課題です。ベラルーシからあまり遠くないノボキャンプ、で生き生き活動する子ども達の映像は・・・。本当にもっと費用があれば、もっともっと多くの子供達に参加してもらいたいなあと思わせるものでした。

スライドを使い報告する
振津さん

分かりやすく,熱く語る
長澤君

山科さんの話しをまとめ紹介していこう、保養キャンペーンをさらに広げよう、来年の２５周年にはベラルーシの被災地から招待交流をしよう、現地からできれば若い世代の方々を招聘、日本でも中高生を含めて支援交流にむけての準備を行おう、チェルノブイリのヒバクシャの声を原発推進の企業に届けよう・・・話し合いたいことは山積みながら、以上をまとめました。最後に関西電力への申し入れ書を読み上げ確認して終わりました。

（長澤由美）

司会の久保さん・田中さん

森田さんの歌と
ピアノに聴き入る

被爆６５周年―語り継ぐのが私の使命

山科和子

～チェルノブイリ原発事故後間もなく旧ソ連を訪れて～

今年は被爆６５周年でございます。私は、チェルノブイリには原発事故後まだ半年も経っていない時に、ソ連―その頃はまだロシアではなくソ連時代でしたけどーに「長崎の鐘」を贈る為に持って行きました。今の赤の広場の横、ロシアの政庁のある所でお話したんです。その時にソ連政府は「チェルノブイリは大したことはなかった。ソ連政府は救援物資を送ったし、汚染されていない食糧を送った。また皆移住させたから被曝者は出ていない。日本は敗戦直後だったからそれで被爆者が広島・長崎に沢山出たんだ。」と私たちを否定したんです。でも私は一人手を挙げて「必ず私みたいな被曝者ができる。」とその時身体に沢山できていた紫斑を見せて言いました。そうすると、私一人を別室に平和委員長が呼んでソ連の通訳と３人だけで、１時間半も私の話をずーと聞いてくれました。私の本当の苦しさ、そして被爆者であるが故にという事を話しました。それから先、１週間かけてソ連をずーと回り、チェルノブイリにも行って来ました。その時はチェルノブイリ原発を遠くから見て帰ったんです。

語り継ぐという強い思いを胸に

～関東大震災を生き残り、長崎で被爆～

私自身の被爆体験を先に申し上げておきます。

私の父は官吏で、東京に居ました。その時関東大震災に遭いました。世田谷に住んでいて、郊外に竹藪がありました。丁度お昼時で母が台所に立っていて、家が潰れた時、母は私を助け出すのが精いっぱいだったそうです。そして何の救助もなしに竹藪で過ごしたそうですけど、その後の事は分かりません。余震が続くので母が「怖い、怖い、東京に住みたくない。」とばかり言いますので、父も諦めて、二人とも九州の出身ですので、それから東京からずーと下ってきました。ですから３年と長く居ないで１年で変わった事もあります。幼稚園は広島でした。小学校は下関でした。最終長崎に行って原爆に遭い、私一人生き残りました。

～原爆で両親・兄弟を失って～

その頃長崎市内におりました。丁度爆心地になる山里町、長崎大の広い運動場のある、医療の手もある、そして大浦天主堂もある、あれは外国から資材を持ち運んで建てた所ですので、アメリカ軍はそこ

を襲わないだろう、市内は危ないという事で１年前にそこに疎開したんです。そしたらそこが爆心地になりました。実は北九州市にある小倉に落とすつもりできたのが雲が低くて見えなかったので、司令を仰いで、第二目標の長崎に行って、長崎で雲間からチラッと家が見えた所にここぞと思って落としたのが、長崎の中心地から２k以上離れた郊外だったわけです。そしてその飛行機は急旋回して長崎を離れ、その頃は沖縄はもうアメリカ軍の手に入っていましたので、沖縄で給油してそしてテニアン島に帰って行ったそうです。だから広島は２０万人の人が亡くなり、長崎は１０万人の人と言う事は、郊外に落としたためと、その頃は皆お勤めに出ており、住んでいる人は少なかったという事で、死者は少ないんです。被害は今の長崎にしても、どこに原爆が落ちたんだろうと分からなような所ですけど、でも皆さん御承知のとおり、長崎原爆の方がきつかったんです。私は１９８２年にアメリカに行って来ました。その頃まだ３つしか原爆が作ってなくて、１つはニューメキシコ州のアラモゴードで実験を行い、そして１つは広島に落とし、１つは長崎に落としたんです。だからアメリカのいい実験になった訳なんです。

私は関東大震災の後東京を離れて、母方の祖父に預けられました。その祖父は小倉藩の家老でしたのですごく厳しく、小さな私に「愚痴を言うな、泣き言言うな、言い訳するな」と厳しい教育をしたんです。私はあの原爆で本当に辛い事がありました。被爆者であるが故にいまだに差別があるんです。その差別を本当に何も言わんと耐え忍んできました。私は弟と妹が４人いますが、一人の弟は海軍の学校に行っており、一番下の妹は小学５年生で学童疎開しておりましたので、その二人は助かりました。

死んだ弟は長崎のまだ中学生でした。妹は奈良の学校に行って寮生活をしており、８月の夏休みで長崎に５日に帰ってきて９日に死んだんです。父は家の焼け跡で真っ黒になって倒れていました。もう目の玉もありません。頬の肉もありません。そしてお腹の肉もありません。仰向けに倒れ標本室にある骸骨そのものです。母はうつ伏せになってお尻の骨はボロボロでした。長崎医大の生き残られた偉い先生が、私のような生き残った者が集まった時に「長崎市内は空襲を受けていないから助かっている。焼けたここは大丈夫だ。長崎市内に帰るよりここにいる方が安全だよ。」と言われました。放射能の事はまだ全然分かっていない時ですから、私はその先生と一緒にその爆心地に残って、死んだ弟と妹の死骸を探していました。ちょうど東住吉の私の家の１００mの所に模擬爆弾という長崎と同じような５トン爆弾を落としたんです。あれには放射能が無かったんです。でも家も潰れて市民の方も亡くなられました。毎年７月２６日に法要しますので私もそこに行きます。当時あの放射能の恐ろしさというのは全然分かっていませんでした。あの偉い先生方も。それで私は爆心地にそのまま居て探しましたけど、弟と妹もどうしても分からないまま１０日経ちました。食べる物も何もありません。地べたに寝て川の水を飲みました。ウジ虫が湧いて皮膚を噛みます。１０日も経つと、夏も８月なので、臭い臭いあの臭さは忘れられません。

そして長崎駅に行って父の死を告げ時、駅員さんは「あんたの顔色は生きている人の顔色じゃない。早く長崎を出なさい。明日の晩に門司港行きの夜行列車が出るからそれに乗りなさ
い。」と言うてくれました。それで私は焼け跡に帰って父と母のお骨だけ拾ってその晩に出ました。あの頃の日本人は本当に一生懸命で、ズタズタになった線路の石一つ一つを捨てて線路を作って門司港ま

で列車を走らせたんです。そして母方の祖母の家に行きましたけど、血を吐いたり、膿が出たりしたものですから九州大学の病院にいきました。けど「あんたに食べさせる食糧はない。医療もない。」そう言われて１カ月で退院して家で養生しました。

～「原爆のことを語るのが使命」森滝先生の言葉に支えられ～

１８年経ってから体中が真っ黒になって、丁度焼け跡に転がっていた死体同様になりました。その頃は神戸に出てきていて神戸医大の尼崎分院に入院しました。先生は、私が痛い、痒い、熱があるというので、熱さましを飲ませたり、痒いというので顔に薬を塗ってくれますとそれに反発して真っ赤に腫れて血膿が出るようになりました。何度も死を告げられました。ここまで生き延びてこられたのも、アメリカで国連広場からセントラルパークまで平和行進した時に、森滝先生に「あんたが死んでも当たり前のところをこうして生きてきたのは、原爆の事を語りなさい。それが貴方の使命だよ。これまで生きてきたあんたの運命を神様が支えて下さったのだから。」と言われたからです。それで私は２２カ国で原爆の事を話し、国際会議にも出て、そして地域の学校に行っても放射能の悲惨さを話しています。そういう生活をいまだにしています。私が生き延びたのも皆さんのおかげ、皆さんの力添えで本当にありがたいと思います。

～今も続く差別～

でも被爆者は当時「被爆者は恋をするな、結婚するな、子供を産むな」とまで言われたんです。正直それを守ったのは私なんです。いまだに被爆二世・被爆三世と分かれば、いろんな差別、結婚差別があります。私は今被団協の理事をやっておりますし、東住吉の会長もしてます。今度６月に被爆者健診があります。府庁の方はお金がありますから案内が封筒で来ますけど私どもの会ではお金が無いのでハガキで、折鶴の会・山科和子の個人名で、健診の案内を出します。府庁からは健診の場所を１カ所しか教えてくれないので、３カ所での場所を書き、自分の都合のいい日に来て下さいと。そのかわり原爆のゲの字も出しません。被爆手帳を持ってきて下さいという事も書きません。被爆手帳がないと健診が受けられませんけど、それも書きません。私個人の名前で、ご自分の為ですから健診を受けて下さいという事を書きますけど。マンションなんかの郵便受けに入りますと「あの人は被爆者かいな、あの人は被爆二世かいな』といまだにそういう事があります。

反核フェステバルでも、私のテントは原爆のゲの字も書いてはおりません。折鶴の会という名で出しております。被爆者のパンフレット・パネルそういうものは教職員組合の先生方が中央に貼ってくださって、わたしのテントは被爆者ということが分かると困る事があるので出しておりません。

～生きている限り語り続ける～

私は長居公園で「戦争はいやや、核なんかいらへん」という反核フェステバルの代表をしています。アメリカに８２年に行って帰ってから、日本でも何か大きな仕事をしようと思って、長居公園で２５年間続けております。

被爆者も年老いてきましたし、語り部も少なくなりました。わたしも８８を過ぎました。その頃５つや６っつだった人は原爆の事をよく知りませんし、親がおってぬくぬくと育った者はあの焼け跡の臭いとかそうしたものは分かりません。いつも私が後悔するのは、日清・日露の時に陰で泣いている人たちもいたのに子供の私たちは「戦争に勝った、勝った」そればかり教えられて何も知りませんでした。だから被爆者の事を生きている限り語り続けようと思っています。私は滋賀の方に小さな家を建てていますけど、あそこのお墓は普通のお墓じゃないんです。日清・日露の戦争で亡くなった方のお墓は大砲の砲のようなこんな形をしている。〇〇上等兵の墓、〇〇少尉の墓、そんな風に書いてあるんです。だからやはり生きている限り話したいと思って、こういうことをしています。そして下手に喋ると、「あの人変な人じゃないか」と言うような差別もありますけど、この年になったら私は差別なんか気にしないと思っております。

～チェルノブイリの子供達にも被爆体験を語り伝えたい～

だから私は私の被爆体験をチェルノブイリの子供達に何とかして伝えたいと思っています。子供達は私が行った時に「おばちゃんはどうしてそんなに元気なの？僕は入院待
ち。」その子は入院待ちでお薬もない時でした。だから入院待ちしていて甲状腺が腫れあがっていたんです。「どうしておばちゃんは被爆者なのにそんなに元気があるの？日本から、遠くから来たの
に。」そんな風に言うてくれました。背中を撫でてそして「おばちゃんみたいに元気になるのよ、あなたも。お医者さんが診てくれるのよ。お薬も飲みなさいよ。」言うて色々言い聞かせました。チェルノブイリの方々にも私の被爆体験を語り伝えて、あの子たちが元気に過ごしていくように、そして差別のないチェルノブイリができるように、ヒバクの先輩としていろんな事を語り伝えていきたいといのが私の今の願いです。

もう被爆者も６５年が経ちましたらこの世から消えて亡くなると思います。私が話しました事を皆様のお心の中に留めおかれまして、日本の原発にも反対する、日本を核のない美しい新しい時代にできますようにお祈りして今日のお話を終わらさせていただきます。有難うございました。

≪歌と朗読のコーナー≫

☆ベラルーシの友人たちからのメッセージ

山科さんの「米寿」を祝して、ベラルーシの友人がビデオメッセージを下さいました。
長辻幸さんが再構成し、長辻さんと長沢由美さんが朗読してくださいました。

私たちの敬愛する、山科さん

山科さんはいつもとっても前向きで、今でもそのエネルギーは溢れんばかり。
私たちは、そのお姿にどれほど元気をもらったことでしょう。

山科さんは私たちにとって「ヒバクシャの先輩」です。
長崎で被爆され、大変な困難と苦労を経験されてきた。
でも、そんな悲惨な体験を自分の中にしまい込むのではなく、ヒバクシャとして立ち上がり、声を上げてこられた。
「私のようなヒバクシャを、核の被害者を二度と生んではいけません！」と。
私たちは、そのお姿にどれほど尊敬の気持ちを抱いていることでしょう。

救援関西の招待で日本に行ったときのこと。
山科さんは広島の原爆資料館を案内して下さいましたね。
今でもその時のことはよく覚えています。
そこで見たもの、聞いたことは、原爆の恐ろしさ、いいえ、核の恐ろしさをとても強く印象づけるものだった。
そして……
私たちが、「平和利用」という名の下に使われた核の被害者だということを改めて実感したのです。

日本の皆さんは広島・長崎の体験を被爆者の方々から聞き、その体験を忘れることなく次の世代に伝えていらっしゃいますね。
私たちもまた、あのチェルノブイリの体験を次の世代に伝え、若い人々の手に託さなければならないと思っています。
この地球上で同じ悲劇を二度と繰り返さないために、何をすべきなのか、そして、何をしてはいけな

いのか。

それなのに……
ベラルーシでは原子力発電所が建てられようとしています。
ベラルーシだけでなく、全世界にとってのリスクであることはチェルノブイリでの体験から誰の目にも明らかなのに……
私たちは、山科さんがこの知らせをどんな思いで聞いていらっしゃるのだろうかと思うと、とても胸が痛むのです。

救援関西とのお付き合いもずいぶんと長くなりました。
私たち自身、未だにいつも健康のことを気にかけながら暮らしていますが、
日本の皆さんが支援して下さっていることに心から感謝しています。
山科さんは長崎でのつらい経験を乗り越えて来られた。
だからこそ、チェルノブイリのヒバクシャの苦しみを理解し、痛みを受け止めてくださっているのだと思います。

お馴染み名Ｎ－Ｎコンビ（長辻さんと長澤さん）

私たちは、その優しさにどんなに助けられていることでしょう。

ベラルーシでは、子どもたちに「親を大切にしなさい」と言って聞かせます。
そして、「これまでの人生で苦労を重ねてこられた方々を大事にしなければいけませんよ」と話します。
そうやって、私たちはお互いに助け合いながら生活しているのです。
このような助け合いの輪が遠く離れた日本とベラルーシで育まれてきた。
それは、山科さんの体験と私たちの体験をつなぐ「ヒバク」という悲しい出来事から始まったもの　かもしれないけれど、
今ではそれ以上のものを、もっと大切なものをたくさん受け取っているのです。

日本の皆さんとベラルーシの私たちが育んできたこの輪が、これからもずっと続きますように。
私たちの子どもたちも、そして、その次の世代も、同じ思いでつながりあえますように。
そう、山科さんがとても強く抱いている思い。
「ヒバクシャを、核の被害者を二度と生んではいけません！」
私たちは、そのことを切に願ってやみません。

☆栗原　貞子さんの詩

６５年前のあの日の事に思いを寄せてよせて、栗原貞子さんの詩を声楽家の森田留美さんの歌と長辻幸さんの朗読が伝えてくださいました。

生ましめんかな　　―原子爆弾秘話―

栗原　貞子

こわれたビルデングの地下室の夜であった。
原子爆弾の負傷者達は
ローソク一本ない暗い地下室を
うずめていっぱいだった。

生ぐさい血の臭い、死臭、汗くさい人いきれ、うめき声。
その中から不思議な声がきこえて来た。
「赤ん坊が生れる」と云うのだ。
この地獄の底のような地下室で今、若い女が
産気づいているのだ。

マッチ一本ないくらがりでどうしたらいいのだろう。
人々は自分の痛みを忘れて気づかった。
と、「私が産婆です。私が生ませましょう」と云ったのは
さっきまでうめいていた重傷者だ。

かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。
かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。

生ましめんかな
生ましめんかな
己が命捨つとも

熱唱する森田さん

2010年4月25日

関西電力株式会社社長　　森　詳介　様

チェルノブイリ原発事故24周年に際しての申し入れ

私たちは今日「繰り返さないでチェルノブイリ！チェルノブイリ原発事故24周年の集い、広島・長崎被爆65年とチェルノブイリ25年を結んで」に集いました。

長崎で被爆し、原爆投下直後の凄まじい状況を体験し、その後の65年間に亘る辛い体験を、「生き残った被爆者として語り継ぐのが使命」と懸命に語り部活動と反核・平和運動を続けてこられた山科さんのお話を聞き、被爆の恐ろしさとそのもたらした苦しみを改めて思い知らされました。そしてチェルノブイリのヒバクシャである、ベラルーシの友人たちに思いを馳せ、支援を拡げ、さらに交流を深めるために、私たちに何ができるかを話し合いました。広島・長崎に原爆投下を受けた日本の私たちとチェルノブイリ事故の被害を受けたベラルーシの友人とを結ぶものは、「ヒバク」という共通の悲惨な体験です。そしてその体験を共有する中で、お互いの信頼関係は深まり「繰り返さないで、ヒロシマ・ナガサキそしてチェルノブイリ」が合言葉となりました。

史上最悪のチェルノブイリ原発事故から明日でまる24年が経ちます。たった1回の原発事故で、広島型原爆の600発分の放射能（ｾｼｳﾑ１３６換算）が放出され、「死の灰」は北半球全体に降り注ぎました。この事故がもたらした深い傷跡は24年経った今も決して癒えることはありません。今も人々は放射能汚染地でヒバクしながらの生活を余儀なくされ、健康被害が顕在化しています。汚染された大地は元には戻りません。

日本では原発が「準国産エネルギー」「温暖化対策の切り札」として位置付けられ、原発の新増設、稼働率アップと寿命延長を図られるなど無謀な強行運転が進められています。貴社は率先してこれらを行っています。また地震が頻発するなか、原発の危険性はますます高まっています。事故が起こる前に原発を止めてください。チェルノブイリはとてつもないほどの甚大な犠牲を払って、ひとたび重大事故が起これば取り返しがつかないことを教えてくれました。私たちは歴史の教訓に学ぶべきです。また例え事故がなくても、原発は被曝労働なしには動かせません。原発は日常的に「ヒバクシャ」を生み出しているのです。安全で本当に「安心な」電力のために一日も早く原発から再生可能なエネルギーに転換してください。

以下の事を申し入れます。

① 耐震性がなく老朽化が進んでいる美浜１・２・３号の施設を即刻閉鎖してください。
② プルサーマル計画を中止・撤回してください。
③ 使用済み核燃料の中間貯蔵施設の立地計画を止めて下さい。
④ 敦賀３・４号増設計画中止を日本原電に勧告してください。
⑤ 六ヶ所再処理工場の運転を中止するように日本原燃に申し入れてください。
⑥ 貴社が先頭に立ち、原発を止め、再生可能エネルギーに転換してください。

以上

「繰り返さないでチェルノブイリ！チェルノブイリ原発事故24周年の集い、広島・長崎被爆65年とチェルノブイリ25年を結んで」集会参加者一同

＊この申し入れは、翌２６日に若狭ネットと関電交渉を行いその際に申し入れました。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2008. 11.4～2009.2.21

鎌橋照子 木下佳子 東野セツ 久保きよ子 堂本ふく子

（順不同・敬称略）

♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣お知らせ◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣♡♠◇♣

◇７月４日(日)午後２時～４時半

非核・平和第20回学習会　「ＮＰＴとウラン兵器禁止」

共催：地球救出アクション・ヒバク反対キャンペーン

場所：苅田土地改良記念会館（地下鉄御堂筋線我孫子駅下車）

◇7月10日(土)10時～13時

フリマだよ！エルフェスタ　チェルノブイリ・ヒバクシャ救援バザー出店

場所：宝塚市男女共同参画センター

問い合わせ：原発に危険性を考える宝塚の会（☎0797-74-6091）

◇7月18日(日)午後2時～4時半

「ヒバクを許さない集い」にむけて

主催：ヒバク反対キャンペーン

場所：阿倍野市民学習センター(地下鉄谷町線阿倍野駅下車・あべのベルタ)

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031　大阪市東住吉区田辺 1-9-12　山科方

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」

郵便振替：００９１０−２−３２７５２